三条税務署長賞

『あなたの一円が誰かの命を守ってる』

新潟県立三条商業高等学校　三年　小栗（おぐり）　りるは

「税金って、本当に必要なのか？」

そんな言葉を聞くたびに、私は立ち止まって考えてしまう。誰かに奪われているような感覚。それが税に対する率直な意見かも知れない。けれど、それだけで済ませてしまっていいのだろうか。高校での経験を通して私は、税金という存在にもっと深い意味があると気づいた。

私たちが日々安心して道を歩き、学校に通い、病気になっても治療を受けられるのは、当然のことではない。そこには無数の人の働きと、それを支える仕組みがある。税はその土台だ。社会という巨大な舞台を支える見えない支柱。もしそれが崩れれば、安全も教育も、すぐに危うくなる。税金とは、個人では成し得ない秩序と安心を、共同で守るための投資なのだ。

新型ウイルスが流行したとき無料でＰＣＲ検査が受けられたこと。豪雨災害の際、避難所に食料が届いたこと。生活に困った人に給付金が配られたこと。それは「今、困っている誰か」に向かって静かに差し出された手なのだ。そしてそのことは、いつか自分自身に向けられるものでもある。

高校で私は、フェアトレードに取り組む活動に参加した。地域のマルシェに出店し、コーヒーやアイスを販売したとき、「こういうのを選ぶって大切なことだね。」と声をかけてくれる人がいた。その言葉が忘れられない。他人の暮らしを尊重し、支えるという行為には、目に見えないつながりがある。税金もまた、目の前にいない誰かを支える手段だ。直接的ではないけれど確かに生きる力になる。そこに私は誇りを感じた。

社会には、声を上げられない人がいる。支援がなければ立っていられない人もいる。その存在を無視せず、共に生きる道を選ぶこと。私はそれこそが、税金の本質だと思う。義務ではなく、信頼と希望のリレー。自分のためだけでなく、誰かのために納めるという選択ができる社会にこそ、未来がある。

これから私は、社会に出て働く立場になる。税を納める側として、自分の意思がどう使われるかに無関心ではいたくない。無駄にされていないか、不公平がないか。そうしたことに関心を持ち続けることは、単に国を批判するためではなく、より良い社会にするための当事者となるためだ。

税金とは、国家に従う行為ではなく、未来に対する責任を持つ意思表示だ。無関心でいては、無責任な社会になる。私は自分の払う一円に意味を込めたい。小さな金額でも誰かの明日を照らす光になると信じて。

だから私は、こう考える。

税とは、社会への参加を選ぶ者だけが手にできる、大人の証なのだ。